

専門教育の添え物を脱するとき

—熊本大学卒業生・修了生として必要な教養とは何か?—

大学教育機能開発総合研究センター長
藤本 斉

平成15(2003)年度に省令施設として設置されてから、大学教育機能開発総合研究センターは今年4月で13年目を迎えることになる。中期目標・中期計画の二期12年の間、大学教育研究部としての機能を果たしてきた。第三期中期目標・中期計画が始まる平成28(2016)年度に当センターは、大きな改組の波に飲み込まれ、新たなセンターとして生まれ変わろうとしている。そこで、本年報の巻頭言にこれまでの本センターの歴史を留める。同時に、今後の新たな体制の下での教養教育を含めた全学共通教育への期待を込め本稿を書かせていただく。

平成6(1994)年度に大綱化に伴う教養部廃止により、教養教育実施に責任をもつ担当者集団である教科集団が全学出動態勢のもとで編成された。この教科集団体制は、様々な紆余曲折はあったものの現在まで綿々と受け継がれている。平成9(1997)年度に教養教育実施のための実質的な責任母体として、また、教養教育を含む大学教育に関する調査研究を行う組織として大学教育センターを学内措置により設置した。この大学教育センターの研究部を独立させたものが、現在の大学教育機能開発総合研究センターである。カリキュラム開発部門、FD・教育評価部門及び教育システム開発部門の三部門からなり、大学教育に係る調査研究と教育システムの開発に当たってきた。加えて、平成17(2005)年度から、大学教育における新しい試みや挑戦について知り、今後の在り方や展望について考え、議論していただく機会として国内外の著名な研究者を講師としてお招きした21世紀型大学教育セミナーを開催し、これまでに21回(執筆時点の1月末現在、3月に第22回を開催予定)の研究会を開催してきた。大学教育機能開発総合研究センターは、大学教育の調査研究を通して本学の教育活動の充実を主たる目的として設置されたが、中期目標・中期計画の二期12年にわたり、本学の教養教育を含め大学教育の実施、運営と改善にも貢献してきた。一方で本学では、平成26(2014)年度に地(知)の拠点整備事業(COC)「活力ある地域社会を共に創る火の国人材育成事業」が、平成27(2015)年度にスーパーグローバル大学創生支援(タイプBグローバル化牽引型)「地域と世界をつなぐグローバル大学Kumamoto」及び地(知)の拠点大学による地方創生事業(COC+)「“オール熊本”で取り組む熊本産業創生と雇用創出のための教育プログラム」が採択された。これらの事業は、そのすべてが教養教育を含む全学共通教育に関わるものであり、加えて、削減され少なくなっていく教育予算と人員で全学共通教育を維持せざるを得ない状況を余儀なくされている。そこで、より効率的かつ実効性のある全学共通教育を実現するための新たなセンターの設置に向け、平成28(2016)年度に現行の組織を改編することになっている。

さて、本題の「教養とは？」に戻ることにする。私は、化学の中の一分野である物理化学を専門としている。平成9(1997)年度に教養教育の科目を担当することになって以来、「教養教育における“化学”とは」を常に考えながら授業担当してきた。偉そうなことをシラバスに書きながら、いまだに私の中で明快な答を得られないでいる。もしかすると生涯答を見つけれずに終わるのではないかと、最近思い始めた。ある時この自問の悩みをある方にお話しした折、「悩んでいる背中を見せることも(教養)教育なのではないですか」とのアドバイスを頂き、少し肩の荷が下りたのを憶えている。今のところ漠然とはあるが、「化学という“学問観”あるいは化学の“物質観”を通して、知らなくても生に大きな支障はないが、知っ

ていけば平面的に見えていた世界(物事)が多角的・立体的に見えるようになること」を受講者が気付いてくれればと思っている。私の中の「教養教育における化学」探索は今後も続く。

通信技術・輸送技術等の発達に伴い地球上の距離が縮まっている。同時に、多言語間の翻訳も瞬時に行われる時代になりつつある。既にヨーロッパでは言語間の同時翻訳機能が、SNS上で実用実験段階になっていると聞く。また、環境問題など現代社会が直面する課題には、その土地だけでなく国、地域、さらに地球規模で考えないと解決できないものが多い。10年後にはglobalを越えてcosmicと大学では言っているかもしれないなどという空想はさておき、今後は、国際共通言語を駆使する能力よりも母語を正しく使い自らの考えを表現する能力と他者との違いを認識できる能力が必要になってくるのではないかと思う。まずは、自分を、そして地域と母国の文化、風土、歴史を知ることが重要になるのではないだろうか。

もう一点、大学にいて最近気になることがある。歳のせいかもしれないが、“とき”があまりにも早く流れていく。教職員も学生も、成果や結果を出すことにあまりにも拙速になってしまっている気がしてならない。世間に流されず、ゆっくりと“とき”が流れていくところ、また、それを許せる場所が大学だったのではないか。かつて灘高等学校で国語教師として教鞭をとられていた橋本武先生が、生徒に向かって言った言葉がある。

スピードが大事なんじゃない。すぐ役立つことは、すぐに役立たなくなります。何でもいい、少しでも興味をもったことから気持ちを起こして行って、どんどん自分で掘り下げてほしい。そうやって自分で見つけたことは君たちの一生の財産になります。そのことはいつか分かりますから。

学生だからできる何か夢中になれるものを見つけることも、大学として大切にすべきではないだろうか。

文学部、法学部、教育学部、理学部、工学部、医学部、薬学部の7学部を擁する総合大学としての教養教育は、他大学と差別化できる格好の材料でもあり、本学の特色や強みとなり得る。多くの大学人の知恵を結集していただき、是非とも名前の付け替えだけで終わらない実りある教育改革を願う。